よからず、不通なれば、疑もなく三井がいつはりに定るべし、三井惑亂して、淺見を證人にしたりと誹笑ふ人多し、さて聚樂の廣間に奉行列坐して、雀部淡路守をもて尋問る、淺見承り、生瀨は年ごろの知音なり、三井とは不通にて候、是非世の人の評せん事も迷惑なり、他人に仰付られよと懇に辭し申す、○略中秀次聞て重ねて辭すべからずとなりければ、其時淺見今は已事を得ず候、武義の論少も詐僞候まじ、坂井が首は三井がとりたるにまぎれなく、又其はたらきも比類少く候、生瀨は何と存過たるにやといひければ、一座駭て、とかくいふ人なく、これによりて三井を赦て賞せらる、○略下

失名譽

〔太閤記六〕今度於柳瀨表有戰功者被賞之事

片桐助作後號東市正、慶長之末、於大坂秀頼公へ逆心有て、攝津茨木へ立退しが、大坂を攻給ひし時、御母堂のおはします所をよく知て、大鐵炮を打入、城をいたましむ事異他、秀頼公を亡し、百日を過し侍らで令病死、億兆之指頭にかゝり名を汚しけり、

〔近世名家書畫談下〕大雅歿後遺墨を賣る事

大雅死後、門人等老師の籠中より多くの遺墨を搜り出せしに、○略中遽に乞求るもの各報るに多金をいだし、其金集りて七百兩にみてり、○略中因て憶ふに、伊勢寂照寺月仙和尚は、一時畫名高く、年ごとに、千金の潤筆を得たりと云傳ふ、されども遷化の後は、其畫價もなく、名も又從て衰へたり、これを譬ふるに、一時權勢を得て氣燄の盛んなるも、一旦其衰ふるに至りては、門に雀羅を設るが如し、實に名は蓋棺の後にして定るとやらん、宜哉、

自讃

〔枕草子五〕雨のうちはへ降るころ、けふもふるに、御使にて、式部のぜうのぶつねまいりたり、例のしとねさし出したるを、つねよりも遠くおしやりてゐたれば、あれは誰がれうぞといへば、わらひて、かゝる雨にのぼり侍らば、あしかたつきて、いとふびんに、きたなげになり侍りなんと言へ